ワークショップ「低侵襲検査による肝予備能評価」

司会：岡田　真広　先生（日本大学医学部放射線医学系放射線医学分野）
　　中島　　淳　先生（横浜市立大学肝胆膵消化器）

【司会の言葉】
肝予備能評価は ICG 測定や Child-Pugh 分類により行われることが多いが、日常の画像診断に用いられている、US、CT、MR といった低侵襲検査は、肝細胞癌を中心とした肝腫瘍の早期発見や腫瘍 Viability の評価、治療後の再発評価等のみならず、肝予備能の評価にも応用が可能となってきた。肝の線維化が進行すると，肝予備能が悪化していくため、肝硬度測定である Ultrasound Elastography や Magnetic Resonance Elastography の評価が有用である。CT では Dual energy 技術を用いて肝実質の組織（物質）分別を行う手法があり、EOB 造影 MRI では肝細胞機能を造影剤の取り込みの観点から画像化することもできる。今後は、これらの画像的な肝実質評価が人工知能（AI）と結びついて進歩していく可能性もある。
画像以外の低侵襲性検査として、糖鎖マーカーである Mac-結合タンパク糖鎖修飾異性体や IV 型コラーゲンなどは主に肝線維化のマーカーとして有用であり、ほかにも腫瘍マーカーや遺伝子・ゲノム解析等の発展もめざましい。
本ワークショップでは、様々な分野から肝予備能評価を行う幅広く発表して頂き、明日の実臨床に役立つ議論を行いたい。